

最初に、渡辺先生が「人間学群が好きですか？」という質問をされた。最近、将来のことだけではなく、友人たちと議論する機会が増えた。このような仲間に出会えたことで、私は人間学群にきてよかったと感じている。

先生のお話からは、インターンシップを通して自分の五感を使って経験することが大切だということを読んだ。「なぜインターンシップにいきたいのか、何を知りたいのか」といったタスクを明確に決め、それが叶う企業に行って「何を得たか」を振り返り、学びの記憶をとって、判断力を養うことが重要である。これは、インターンシップだけでなく普段の生活にも言えることなのではないかと思った。

先輩のお話からは、早い時期にインターンシップに行くことの意義や、思い立って行動に移すことの重要性が伝わってきた。ほとんどのインターンシップは給与も出ず、交通費も自腹だというのが、一貫した意志や責任をもつこと、責任が信頼に繋がることの大切さを実感するするために、その価値はあると思った。また「自律して計画的にキャリアを描こう」という言葉が印象的だった。そのためには自分の働いている姿をイメージしなければいけないが、インターンシップを通してそれが確立するのだという。

授業を受ける前はまだ先のことだと考えていたインターンシップだが、授業を通して、より身近に感じられるようになった。
(教育学類1年 倉澤織江)

そもそもインターンシップとは何なのだろうか？。漠然と、何となく分かっていた気がしたが、インターンシップを体験した人の話を聞くと、どうも自分がインターンシップの部分的なところしか見えていなかったことにはっとした。まず、それは単なる職業体験ではなく、「生活体験」として行われていることである。つまり、例えば自分のゆとりの時間にアルバイトを入れるなど、アルバイトが生活の二次的なものであるのに対し、まず仕事を生活の軸とする生活をインターンシップで経験するということである。しかも、教育実習のように1か月に渡る長期の場合もあるということである。このように仕事を基調とする生活こそ、社会人になって目の当たりにするものであり、アルバイト以上に現実的であることに気づいた。そして、それが「社会の中で生きること」なのだなあと思った。そういう意味で、インターンシップはわたしたちが考えている以上に新たな発見が出来るのではないかという興味が湧いてきた。この授業は、私のキャリアを考える上で一つの良質な情報を与えてくれたと思う。
(心理学類1年 堀部勇氣)

今回、キャリアデザイン入門の授業のなかでインターンシップに関する講義を実施して頂いて本当によかったと思います。

私は、インターンシップとは、就職と直接な関わりがあり、就職活動の一環のようなイメージを持っていました。しかし、今回の講義を通じて、インターンシップがボランティアなどと並んで社会的活動として注目されてきていることを知りました。実際に企業など

で実務をし、身をもって経験することにより、社会の構造を知ったり、大学での勉強と社会の関係を見出すことは、自分がいま大学で学んでいる知識が、どのように社会に生きてくるか考えることにも繋がるということを知り、インターンシップの目的を考えさせられました。

体験談も2年生と4年生で違う学年の方のお話が聞けてよかったと思います。しかし、どちらも教育学主専攻で、文部科学省が体験先だったことが残念でした。心理学や障害科学の方、また企業に体験に行った方のお話も伺ってみたいかったです。

大学1年の段階でインターンシップについて知ることは、時間的な余裕もあり、いろいろな企業などでの体験ができる可能性も広がり、とてもよいと思いました。

(障害科学類 仲本ひろ美)